

### Ⅲ

## 英語教育研究グループ

### 「ABC to the World」

#### <研究員>

千里新田小学校	教諭	佐藤 綾那
千里丘北小学校	教諭	佐野 彩子
藤白台小学校	教諭	永森 美智子
千里みらい夢学園 桃山台小学校	教諭	和志武 玲子
第六中学校	教諭	米田 理英
山田中学校	教諭	橋本 道信
山田東中学校	教諭	岩田 将
千里みらい夢学園 竹見台中学校	指導教諭	藤田 幸

#### <スーパーバイザー>

関西大学	教授	竹内 理
------	----	------

## 1. はじめに

平成32年度(2020年度)から新学習指導要領による英語教育が実施されることに先駆け、本市では文部科学省の教育課程特例校制度の適用により、小学1年からの英語教育に平成23年度(2011年度)から順次取り組んでおり、平成29年度(2017年度)にはすべての小学校において実施されることとなります。

この取組を通して培われた学びや子どもたちの学ぶ意欲をいかに次のステップへ繋ぐかが、吹田市で取り組む小中一貫教育における「英語力」の育成に不可欠であると考えます。

本研究グループは、「ABC to the World」をテーマとし、グローバル化が進む社会で活躍できる国際性豊かな子どもの育成をめざし、小学校において特例校を中心に取組が進んでいる「外国語活動」と中学校で育む「英語力」をいかに繋ぐか、スーパーバイザーである関西大学教授の竹内先生より、国の動向や先進校(先進市)等の取組を伺いながら、吹田の英語教育の充実に向けて、また「英語で話せる吹田っ子」に繋がる「英語力」の育成に向けて、小中一貫の取組を柱に研究を進めています。

## 2. 研究目的と概要

子どもたちが英語を使っていきいきとコミュニケーションを図ることができるような取組となるよう、小・中各校での日々の授業を見つめ直し、より効果的な方法を見出したいという思いから、研究が始まりました。

「外国語活動」を指導している小学校の研究員、「英語」を指導している中学校の研究員が「①日々の授業について」「②校種ごとの課題」「③小中連携するうえでの課題」について意見交流する中で、校種ごとの取組のよさを活用し、段差解消の工夫を考えることで、それぞれの学び(「力」)を最大限に生かせるのではと考えました。

小中一貫教育カリキュラムに取り組み、「英語力」を育成するために、まずは「めざす子ども像」となるゴール(イメージ)を定め、以下に示す3つの段階のそれぞれのステップで子どもたちに「つきたい力」、また、そのために有効な学習活動等について実践をもとに考えることとしました。

### 3つの段階

- ① 中学校英語力(中学3年)のめざすところ
- ② 小学6年と中学1年の段差解消
- ③ 小学校外国語活動で身につけておくこと

まず、中学3年の英語力のめざすところについて考えました。そして、英語教育の入門期である中学1年の学習と小学校高学年での「外国語活動」をどのように結びつけることができるか。最後に、中学校において英語を学ぶために小学校「外国語活動」で身につけておくことよいことについて探ってみることにしました。

### 3. 中学校英語力（中学3年）のめざすところ

「書く」力の育成 ⇒ 「スピーキング」を活用した「書く」力

義務教育における英語の位置づけとして、「①コミュニケーション能力の基礎を養う。」「②初歩的な英語を聞いたり、話したりできる。」「③初歩的な英語を書いたり、読んだりできる。」が挙げられます。端的に言うと、初歩的なこと・基礎的なことを中心に学ぶということ。言い換えれば、子どもたちが中学校英語において学習する文法事項等を習得することができれば、それを活用し、日常的な英語でのコミュニケーションを図ることができるようになるということだと考えました。

自分の考えはもちろん、相手の考えを理解したり、そこから新たな考えを生み出したりする双方向のやりとり（学習活動）に授業の中で取り組むことができれば、私たちがめざす子どもたちにつけたい「英語力」の育成に繋がるのではないかと考えました。その集大成の1つの形として、英語による「ディベート」の設定を行いました。

英語で「ディベート」をする意義としては、他者に自分の意見を正確に伝える必要があるため、相手を意識し、目的に合わせた言葉や表現を子ども自身がしっかり考えることにより、話す（伝える）という意識が高まるということです。話す（伝える）ことを英作文することで、書く力の向上にも繋がります。書くことは、自分の考えを整理することにも役立ち、より精選した効果的な内容を生み出すことにもなります。また、他者の意見を正確に理解する必要があるため、聞く（受けとめる）という意識が高まり、賛否のみならず、質疑応答等、臨機応変に対応する能力を高めることにもなります。そして、先の学習となる高等学校におけるオールイングリッシュで実施される英語の授業のデモンストレーションとしての要素も多少なりとももっていると考えます。

英語による「ディベート」の実施にあたっては、文法事項の修了や子どもたちの身近にあるものからのテーマ設定など、より活発なやりとりができるような手立てを工夫することが必要ですが、「ディベート」中の「話す」・「聞く」のやりとりにとどまらず、情報収集の際、英文で書かれた資料を読んだり、自分の考えを英作文で表現したりするなど、4技能をフル活用し、なおかつ、チーム力を駆使しながらコミュニケーションを図ることができる取組であると考えています。

実際の取組を終えて、「楽しかった。」や「もう一度やってみたい。」という子どもたちの振り返りから成果を感じながらも、同時に課題も明確となりました。自分の考えをまとめた原稿を読み伝えることにとどまり、英語で表現することの難しさ（不慣れさ）を感じた子どもの存在は否めず、この点については、関西大学教授の竹内先生より「パワーポイントを使って考えを伝えさせるような視覚教材の活用等があれば、苦手とする子に対して違ったアプローチができたかもしれない。」と具体的なお助言をいただき、よりアクティブに取り組ませる必要性を感じました。

## 4. 中学1年の英語教育—「入門期」の取組

### 「小中連携 ～小6と中1の段差の解消～ 小中連携で身につけられること」

英語の4技能において、主に表現に関わる技能は「書く」・「話す」であり、昨今とりわけ「話す」ことに重点がおかれます。ここでは、小学校から中学校にかけて、「話す」技能を段階的にどのように伸ばしていくか、1つのプランを紹介します。

まず、小学校外国語活動から中学1年の英語の入門期には、「① show and tell」を行います。これは、実物や絵図を show すなわち、見せながら、2～3文、多くて5文程度で説明するものです。

学習が進んでくると、「② presentation」に移行していきます。これは、抽象的な内容をも含めながら、絵や図といった資料を提示しながら、まとめた英語でスピーチをするというものです。例えば、将来の夢を語ったり、調査報告を行ったりというものです。しかし、①・②については、用意された原稿を用いて話し、リスナーからの質問に答えるという程度のやりとりが生じることはあっても、ほとんどが一方向的なスピーチとなりがちです。

そして、中学校英語の「話す」技能の仕上げが、「③ debate」です。あるテーマについて「肯定側」と「否定側」に分かれ、立論・反駁（反論）をする流れにおいて、立論については事前に準備することが可能であり、一種の presentation と言えます。反駁（反論）については、相手側の主張に対して、その場で即興的に論じ返さねばならず、双方向のやりとりとなる interaction と言えます。この「即興的」ということがポイントであり、debate を取り入れることにより、臨機応変に英語を話す力が身につくと考えられます。これは次期学習指導要領でも重要なポイントであり、今後の英語教育において中心的な活動の1つとなるのではと思われます。

show and tell、presentation、debate などの活動を通して、英語での豊かな表現力の育成を目指しています。表現力豊かな子どもの育成には、よりよい聞き手の育成が大切となります。よい聞き手がいてはじめて子どもたちは失敗を恐れず、安心して自分自身を表現できると考えるからです。このことから子どもたちが good speaker となることはもちろん、good listener としての力も育成していくことが求められます。

good speaker になるためのポイントとして、小学校では clear voice、smile、eye contact を大切にしています。中学校では小学校の clear voice が clarity すなわち、声の大きさ、区切りや抑揚に、smile が delivery すなわち、表情やジェスチャーなどの伝達の工夫に、eye contact が memorization すなわち、暗記するに対応しています。暗記できれば listener との eye contact を取ることができるということです。

## good speaker のポイント

### 小学校

- ① clear voice    ② smile    ③ eye contact

### 中学校 good speaker の評価基準

	Clarity (声)	Delivery (伝達の工夫)	Memorization (暗記)
A	聞き手にわかりやすいように区切りや抑揚に気をつけながら、はっきりと大きな声で、また適切なスピードで発表している。	タイミングよく効果的にジェスチャーや表情などの工夫が見られ、聞き手全体に視線を向けて感情を込めて話をしている。また、聞き手の理解を促すように話し方を工夫している。	原稿に頼らず、ほぼ暗記して堂々とスピーチをしている。
B	区切りや抑揚に気をつけようとしているが、ところどころ聞こえにくい声があったり、スピードが安定していない部分がある。	ジェスチャーや表情などの工夫が見られるところがあり、概ね聞き手の方に視線を向けて話している。また、聞き手の理解を促すように話し方を工夫しているところもある。	原稿にとりどころ目落すことはあるが、スピーチに不自然さを感じない。
C	区切りや抑揚が適切でない部分が多く、全体的に小さい声で聞き取りにくく、話すスピードが不安定である。	ジェスチャーや表情などの工夫がほとんど見られず、あまり聞き手の方に視線を向けて話していない。また、聞き手の理解につながるような話し方の工夫がみられない。	原稿を読んでいるため、スピーチとして不自然に聞こえる。

good listener になるためのポイントは、小学校では smile、eye contact に加えて、手を叩いたり、うなずいたりする clap/nod また、ただ聞くのではなく“One more time, please.” “Big voice, please.” のように聞き取れなかったことを聞き返したり、“What is ~?” のように自分の知らなかったことを尋ねることで、発表の中身に興味をもって聞く姿勢をつくり、listener だけではなく speaker をも育てることに繋がると考えます。小学校での smile、eye contact、clap/nod は中学校の attitude にあたり、reaction については中学校の comprehension にあたります。中学校において、どの程度理解しているかについては writing (記述) させて初めてわかります。

## good listener のポイント

### 小学校

- ① smile    ② eye contact    ③ clap / nod  
④ reaction “One more time, please.” “Big voice, please.”  
“What is ~?”

### 中学校 good listener の評価基準

	Attitude (態度)	Comprehension (理解)	Writing (記述)
A	話し手の方を見て、反応を見せながら集中してスピーチを聞いている。また、speaker と積極的にコミュニケーションをとっている。	スピーチを聞いて、絵などの視覚に訴える資料を助けとして、内容をほぼすべて理解している。	聞きとったスピーチの内容を的確に英語または日本語で記述している。また、さらに知りたいことを書くことができる。
B	話し手の方を見て、集中してスピーチを聞いている。また、speaker とコミュニケーションをとっている。	スピーチを聞いて、絵などの視覚に訴える資料を助けとして、内容を概ね理解している。	聞きとったスピーチの内容を的確に英語または日本語で記述している。
C	話し手に目を向けずに、集中することなくスピーチを聞いている。	スピーチを聞いて、絵などの視覚に訴える資料を助けとしても、内容をほとんど理解できない。	聞きとったスピーチの内容を日本語で記述できない。

\*通常、listeners に対する評価基準は設定しない。また、記述物を点検しなければ「理解」の観点を評価することは難しい。

また、音声と文字を結びつける力の育成が求められます。これは言い換えると「聞く」力から「書く」力へ繋げるということです。小学校では「聞く」「話す」力、中学校では正確に「書く」力が必要とされます。小学校と中学校の接続期において、音声の習得から文字の習得（①音声に慣れる ⇒ ②音声と文字の認識 ⇒ ③音声と文字を結びつける）を自然に行うことで、中学校での英語の学びをスムーズに行うことができると考えます。

小学校において使用しているフラッシュカードには絵と文字を示しています。これは児童が「音声」と「文字」を一致させるための助けとなっています。一方、中学校においては具体的なものを示す言葉から、抽象的な言葉の学習になるため、フラッシュカードは文字だけの表示となっています。また、フォニックスも「音声」と「文字」を結びつけるための教材です。このようなカードやフォニックスのチャンツ、歌などの教材を活用することにより、子どもたちが楽しみながら自然に「音声」と「文字」を一致させることができると考えています。

大阪府公立小学校英語学習6カ年プログラム「DREAM」の活用も有効です。

「DREAM」とは

小学校の6年間で活用できる、英語の4技能（聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと）を育成するプログラムです。英語の歌や物語を通して、繰り返し英語の音声や文字に触れることにより、子どもたちが楽しみながら自然に英語を学習していくようになっていきます。6年間の学びを通じて、子どもたちが将来に夢や希望をふくらませ、英語を使って自分の夢を語るができるようになることをめざしています。

（「大阪府・英語教育推進事業に係る取組み」より抜粋）

## 5. 小学校外国語活動で身につけておくべきこと

小学1・2年の間でめざすことは、まず「英語の発音」に慣れるということです。たくさん英単語を「英語らしい発音」を意識しながら声に出します。orange、supermarket、table、computer など日常的にカタカナとして使用する言葉と英語の発音の違いを意識させながら子どもたちに発音させます。活動に取り組む際の学習環境も大切です。教師も子どもたちと一緒に楽しみながら学ぶという姿勢も効果的であると考えます。

小学3・4年の間でめざすことは、1・2年同様、「英語の発音」に慣れることですが、次のステップとして単語ではなく、英文を「英語らしい発音」を意識しながら声に出します。ALTやCDの発音をよく聞いて、真似をするように繰り返し発音させます。真似ることが慣れることにつながると考えるので、例えば“I like apple.”ではなく“I like apples.”という場合も複数形についての指導は行わず、「音」として慣れさせ、発音させます。

小学5年の間でめざすことは、フォニックスの指導です。ここでもこれまでの学年と同様にALTやCDを活用します。A～Zとa～zについてすべて「アルファベット読み（エイ）」と「音の読み（æ）」を発音させ、慣れられていきます。ALTによっては、低学年の

うちからフォニックスのルールを教えることもありますが、基本的に英語らしい発音に慣れてから、文字を見せながらフォニックスのルールを教えるほうが子どもたちに定着するのではと考えています。

小学6年の間でめざすことは、フォニックスの応用的な指導、フォニックスを意識して英単語と文・文章（可能な限り）を読む努力をさせることです。中学校の英語の入門期の準備として、ある程度のフォニックスの習得をめざします。また、文・文章を読ませながら単数・複数形の違いなどにも気づかせます。最終的な目標は、フォニックスのルールに則った英単語の綴りを見て、発音が予想できるようにすることです。例えば、ALT や CD が音読みで“bag”と発音し、それを聞いた子どもたちがアルファベットカードを「b」「a」「g」と並べることができれば、フォニックスの基礎の定着が確認できます。フォニックスの指導は文字指導にもつながります。そしてこれらが中学校の入門期に活用されるということになります。

「フォニックス」とは

Phonics (フォニックス)  
音と文字を結びつける学習

bag

[b] + [æ] + [g] = bæg

例えば、上記の「bag」は「ビエイジィ」とは読みません。「b」は[b]、「a」は[æ]、「g」は[g]という音をもち、[b][æ][g]を続けると[bæg]と読みます。一文字一文字がもつ音を学習し、初めて見る単語が読めるようになる学習です。

フォニックスの指導にはかなりの知識が必要であることは否めません。実際に指導する前に、英語専科でない小学校の教員もフォニックスについて学ばなければなりません。まずはALTやCDを活用し、子どもたちと一緒に楽しみながら学んでいくという姿勢が大切だと考えています。先述の「DREAM」は教員のスキルアップにも有効な教材だと思われれます。

## 6. おわりに（次年度に向けて）

今年度は、吹田市内小・中学校において新たな取組を考えるということではなく、先行実践を活用し、子どもたちの「英語力」育成を図る効果的な方法を見出すことに焦点化し、研究を進めてきました。関西大学教授の竹内先生よりご助言もいただきましたが、次年度は、子どもたちが思いや考えを形にする（英語で表現する）ことができるよう、言葉と言葉を繋ぐ、つまり、文や文章により表現していくための過程をクローズアップし、子どもたちが着実にステップアップできるような学習方法や指導の手立てについて探っていきたいと考えています。